

# AIDS UPDATE

No.43 2003.12.25

広島大学病院

エイズ医療対策室

内線5581 (輸血部長室)

Internet: [www.aids-chushi.or.jp](http://www.aids-chushi.or.jp)

## 中国四国ブロックの三者協議

本院は広島市民病院、県立広島病院とともに、中国四国地方のブロック拠点病院です。この3病院に、薬害HIVの原告団・弁護団そして厚生省、文科省、広島県、広島市の行政を加えた三者協議が、11月4日に広島市内で開催されました。広島大学病院からは弓削孟文病院長を筆頭に、事務部長、血液内科長、エイズ医療対策室長、看護部長(代理)などが出席しました。

会議は原告団・弁護団の質問書とそれへの回答という形式で進められました。原告団からは大学病院の中での全科の連携体制や看護体制などについて要望がありました。病院としては充実をはかるとともに、地域のネットワークやACC研修なども増やしていくことを約束しました。

AIDS-chushiはエイズ関連情報の伝達や交換を



## 中四国エイズ拠点病院を結ぶ メンバーリスト

<http://www.egroups.co.jp/group/AIDS-chushi>

通じて、中国四国地方のエイズ拠点病院の連携をはかり、この地域のエイズ診療・ケアの向上に役立てることを目的としています。AIDS-chushiの参加資格は、中国四国地方のエイズ拠点病院のケア提供者(医療職--医師、歯科医師、看護師、薬剤師、検査技師など、そして派遣を含めた心理職・福祉職)に限定しています。つまり本院の医療職は大丈夫。入会はエイズ診療担当者(高田)の紹介が必要です。メンバーのリストはメンバー全員に公開します。参加希望の方は、ご連絡下さい。

「J-AIDS」は、オープンなメンバーリストです。700名以上の参加者、5000件以上の投稿記事を参照することができます。両方のメンバーリストの説明については、添付のリーフレットをお読み下さい。

## HIV感染症治療研究会 HIV感染症「治療の手引き」<第7版>

HIV感染症治療研究会は全国のエイズ専門医の勉強会で、代表者はエイズ治療研究開発センターの木村 哲先生と、熊本大学第二内科の満屋裕明先生です。改訂第6版の出版から、まだ1年しかたっていません。新薬の発売、そして新しい臨床試験の結果を踏まえて最新の情報となっています。

<シリーズ>  
ナース河部のざっくばらん(No.4)

エイズ医療対策室 河部康子

今年も残すところあとわずかになってしまいましたが、皆様風邪などひいていませんか？ 今年最後の「ざっくばらん」になりますが、今回は10月に行ったサンフランシスコ研修について書いていきたいと思います。

この研修はエイズ予防財団の事業のひとつで、カリフォルニア大学サンフランシスコ校のエイズ予防研究センターが受託しています。今回院内からは東7病棟の新家さん、9西病棟の久保さんと3名で行きました。2週間でしたが、かなりハードスケジュールで、内容も深いものだったので精神的に辛い事もありましたが、メンバーにも恵まれ、充実した時間を過ごすことができました。

研修の内容は一言では言えないほど、盛りだくさんでした。講義で学ぶものや、ワークショップ形式でディスカッションしながら学ぶもの、あとは病院やNPOの見学など、毎日が新鮮でした。日本と違うのはやはり全体の空気が自由で、共に学びあうという点でした。

私の今回の目的はチーム医療について学ぶことと、HIV診療における看護師の役割について学ぶことでした。まずチーム医療についてですが、カイザーパーマネント病院の見学をしました。医師、ケース・マネージャーの看護師、薬剤師、栄養士、MSW、ヘルスエデュケーター - と呼ばれる健康教育担当者が、それぞれ自分の専門分野での特性をいかし、患者様の生活の質の向上に努めていました。そこにはお互いの職種に対する尊敬の気持ちと、HIV患者をサポートする強いチームが出来上がっていました。どの職種も患者のエンパワーメントを尊重する姿勢は全く同じだと感じました。

アメリカと日本は医療制度の違いがありますが、日本は予防教育がおざなりになっている感があります。アメリカは保険会社にとって、患者が健康であればいるほど、収益が増える仕組みになっており、そのため健康に対してかなり力を注いでいます。今後この予防教育を日本でも取り組んでいかなければいけない点だと痛感しました。

HIV診療における看護師の役割については、この4月からHIV専任ナースとして働いていて自分なりに考えてきたところです。アメリカでも基本的な考え方は同じであることが再確認でき、自信ができました。研修の中で、患者は経験してきたことが自信につながっていくということを聞いた時、それは医療者側も全く同じということに気がきました。患者が自己の持つエンパワーメントによってセルフケアできること、また予防(病気の悪化、合併症の予防)ができるように支えながら、ケアを提供してゆきたいと思います。

看護の基本は人対人ということをより学べた研修でした。この研修に参加できたことを感謝すると共にお世話になった皆さまに深くお礼申し上げます。長くなりましたが、来年が皆様にとって素晴らしい年になりますように。

<ご意見募集>

「AIDS UPDATE」は今後も不定期に発行します。ご意見やご希望がありましたら輸血部までお寄せ下さい。

[TAKATA, OE]

[takata@aims-chushi.or.jp](mailto:takata@aims-chushi.or.jp)